

われら、神の子

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 11章 1～13節

イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」

また、弟子たちに言われた。「あなたがたのうちのだれかに友達がいる、真夜中にその人のところに行き、次のように言ったとしよう。『友よ、パンを三つ貸してください。旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです。』すると、その人は家の中から答えるにちがいない。『面倒をかけないでください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません。』しかし、言うておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。そこで、わたしは言うておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたの中に、魚を欲しがると子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。また、卵を欲しがると、さそりを与える父親がいるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」

[序] 人間は「祈る」動物

人間とは、「欠け」を持った存在です。いつもどこか「飢え渴く心」を抱えている存在と言えるのではないのでしょうか。創世記によれば、人間は、神様によって、いのちの息を吹き込まれて「生きる」者とされました。言いかえれば、神様を離れては真に生きた存在とは言えないのが人間なのだと思います。ですから、人間は、意識する・しないに関わらず、「祈る」存在なのですね。他の動物に聞いたことはないのですが、ただ人間だけが、神様に祈る動物なのではないのでしょうか？

しかし、私たち人間にとって、「祈り」はどうでしょうか？ 私自身、祈りが時々分らなくなることがあります。口から言葉は出てきても、本当に自分はこういうことを祈りたいのかな、どこか、心の底からの祈りとは言えないものを感じてしまうことがあります。私たちは祈る中で虚しさに陥ったり、逆に偽善的になってしまうことがあるのではないのでしょうか。—「祈り」とは、一体何なのでしょう？

[1] 祈りとは何なのですか？

ルカ福音書 11 章の初めの方を見ると、イエス様の弟子たちは、**祈ることを教えて欲しい**とイエス様に懇願しました。ユダヤ人は、今もそうですが、一日に三回祈ることを身につけている民族です。幼い頃からしっかりと教育がなされています。弟子たちもそうだったと思います。けれども、主イエス様が祈っておられるお姿を見、何かが違う、自分たちの祈りはどこか形式的で空々しいと思い、**本当に神様とつながる祈りとは何なのか**を教えて欲しい！と思ったのではないのでしょうか。

そして、イエス様はこの後で「祈るときは、こう言いなさい」と、今私たちが毎週の礼拝でも祈禱会でも祈る、「**主の祈り**」の原型を教えて下さいましたし、また、それに続けて、熱心に求める、「**願い**」としての祈りの必要性も教えて下さいました。

「**主の祈り**」、これは正に、**イエス様ご自身が日々この祈りに生きていた**、その祈りだと言えると思います。それを弟子たちに、そして私たちにも、言わば、分け与えて下さった。これは凄いことです！ イエス様ほど、神様と親しく交わったお方はいません。そのイエス様がされていた祈りを、私たちも祈れるのです。

その内容は、まず**神様を崇め、賛美すること**、あなたの御国(神様のご支配)が来ること、続けて、私たちが生きる上で欠かすことが出来ないもの——それは**毎日のパンと、罪の赦し**ということ——を求めること、また、**この世の誘惑からの守り**ということ、それをあなた方はいつでも祈りなさい、と教えて下さったのです。

そして、この「**主の祈り**」で最も特徴的なことは何かと言いますと、神様を「**父よ**」、と祈っているということなのです。**神様が「遠く」ないのです！**「父」と「子」です。この前の旧約聖書の祈りというのは、**神様と人間の間の隔たり**ということを意識した祈りでありました。神様の名前を口に出して呼ぶこと自体、はばかられたのです。**神様の前に進み出るということは恐ろしいこと、裁きを身に受けるに等しいこと**でした。ところがイエス様は、神様を「父」と呼び、私たちにも「そのように祈りなさい」と勧めて下さるのです。ここに既に、全く新しい**新約聖書の恵みの世界**が始まっている、ということなのです。

[2] 祈りの生活—二つの場面

実際イエス様は、神様を、空々しい思いをもって、或いは厳格な方だと思って「父よ」と祈ったのではないのです。そうではなく、「**アツバ、父よ**」と祈られました。あの十字架を前にしたゲツセマネの園でもイエス様は、「**アツバ、父よ**、あなたは何でもお出来になります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし私が願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と祈られたのです。これは、驚きです。イエス様は、もう心を丸裸にして、喰らいつくようにして「**お父さん！**」と叫

び、祈っているのです。イエス様は、まことの「神の子」です。「神の独り子」です。このような方は他にはいません。ヨハネ福音書では「わたしと父とは一つである」（ヨハネ 10:30）とさえおっしゃっています。私たちが今、祈る時に「天の父なる神よ」と祈れるのは、このイエス様によってなのです。イエス様に付く時、私たちがまた「神の子」として頂けるのです。だからイエス様は、あなたも「(天の)父よ！」と親しく呼んだらいいのですよ、この祈りをあなたの“生活の祈り”にして欲しいと言われているのだと思います。

この「主の祈り」の言葉に続いて、イエス様は一つの喩えを用いて、「しつように求める」祈りをも教えて下さいました。

皆さん、いかがでしょうか？ 祈りの言葉が明確である「主の祈り」の後に、このようななりふりかまわぬ祈りの勧めがあることはちょっと意外な気がしないでしょうか？

私はこれを読んで今回思ったのですが、**私たちの祈りの生活**というのは、大きく分けて**二つの場面**があるのではないのでしょうか。それは、「**日常性**」ということと、「**緊急性**」ということです。「主の祈り」は、言ってみれば日常の祈りです。日々に、何度も何度も繰り返す祈りです。私たちが日々無くては生きてゆけない「日ごとの糧」と「罪の赦し」を、私たちの手足が毎日汚れるように、**毎日、神様の前**に出て祈る祈りと言えらると思います。そしてもう一つ、この、真夜中に友を訪ね、突然家に立ち寄ったお客さんのために三つのパンを求める祈りは、「**緊急性**」の祈りと言えらるかも知れないと私は思いました。

[3] 「真夜中」の訴え

「真夜中」に、急に叩き起こされるような事態、予期せぬ出来事ということは、私たちの生活の中にも、やはり起こって参ります。

私は、約二週間目の2月14日という日にちが、これから忘れることはない日となりました。妹が朝自転車での通勤途上、まさかの交通事故に遭ったということ、もう既に亡くなっている、という電話を受けた時、私は何のことか良くわからず、しばらく**思考回路が停止**してしまいました。電話をくれた妻に「は？ あなたは何を言っているの？」と言ったのを覚えています。すぐには、祈る言葉も出てきませんでした。一瞬、「天」が見えなくなると言いますか、それこそ、**真夜中**のように、**自分が何処にいるのか見失う**ような感じを抱きました。**この世界には「なぜ!? どうして!？」と、心の奥底で叫ばずにはいられないことがある**のですね。あの東日本大震災からも、来週には8年目を迎えます。

しかし、ここでのイエス様による、**真夜中**でもひたすら訴え続けなさいという言葉は、何と**力と慰め**に満ちていることでしょうか！8節にこうあります。「しかし、言っておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつ

ように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。」

とても面白いと思います。イエス様はユーモアのあるお方だと思いますし、また、この場面設定はとても深いと思います。普通、人間が願い事を聞いてあげるのは、人情からです。「友人だから」とか「昔から付き合いがあるから」助けることが通常です。けれども、ここでは敢えて「友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても」と言っています。そんなことは助ける理由にならないと言わんばかりです。そうではなく、「しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう」と言います。これは、凄いことです。つまり、神様は、あなたがどういう存在であるかどうか、そんなことは全く問わず、分け隔てなく、わたしに訴えてくる者を助けると言われるのです。ですから、10 節をご覧ください。—「だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる」。「だれでも」です！

私もその夜、妹の家族と一緒に、警察署で妹の遺体と対面し、帰ってきてから、妻と一緒に祈りました。と言っても聖書の言葉を読んで、少しは祈ったかもしれませんが、後は殆ど言葉になりませんでした。聖書の言葉は、ローマの信徒への手紙 8：26～28 です。「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。」

恥ずかしいことですが、わたしは嗚咽してしまいました。妻も向かいに座って泣いています。私は妻が声をあげて泣いているのを殆ど聞いたことがありませんでした。そして思ったことは、結婚して 30 年以上経つけれども、一緒に泣いたことは初めてかもしれないな、ということです。嬉しい、と言うよりは、有り難いなあ、と思いました。私はここで夫婦自慢をしたいのでは全くないのです。この、自分たちでは解決できない、受け止め切れない真夜中に、イエス様が居て下さった、そのことが本当に大きな慰めであり、感謝でありました。

[4] あなたの「光」と「まこと」とを

その後で、私はひとりで詩編を読んでいて、再び天が開けたような思いが与えられたのですが、それは詩編 42～43 に繰り返し出て来る祈りの言葉です。—「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ、なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう。「御顔こそ、わたしの救い」と。わたしの神よ。」

私は妹が死んで、呻く思いもあったのですが、それと共に後悔のようなもの、自分の罪深さということも突きつけられるのです。こんなに早く死んでしまうのなら、

なぜもっと兄らしく愛を注いであげられなかったのだろう、もうその機会がないじゃないか、という悔いや虚しさがあるのです。

しかし、今私は牧師とされてこの経験を味わわせて頂いているということは、きっと虚しいことではなく、逆ではないかと思わされています。神様は、妹の死を通して語っているのです。「お兄ちゃん、私の死を踏み台にして、少しは人の悲しみ・痛みが分る、牧師らしい牧師になっていきなさいよ」と。遺された家族のことは本当に祈り、一緒に生きて行きたいと強く思わされています。妹は、これからも色々と言ってくれるような気がしています。

「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ、なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう。「御顔こそ、わたしの救い」と。わたしの神よ。」

—そう、信仰というのは、この詩編にあるように、「なお」ですね。現実打ちのめされる時があっても、「わたしはなお、告白しよう。「御顔こそ、わたしの救い」と。わたしの神よ」と言わせて頂ける心を神様は与えて下さいました。また、この詩編 43 編は、3 節でも「あなたの光とまことを遣わしてください。それらはわたしを導き、聖なる山、あなたのいますところに、わたしを伴ってくれるでしょう。」と言っています。この言葉にも慰められました。

神様のご計画が見えなくなってしまう「真夜中」であっても、いや、闇の中だからこそ、「あなたの光とまことを遣わしてください」と心から祈れるのではないのでしょうか。一生懸命、子どもようになって神様の胸元を叩いて良いのです。遠慮することは不信仰なのでしょう。遠慮というのは、神様が一番残念と言いますか、悲しがるのではないのでしょうか。「しつように」というのは、「恥をも厭わずに」ということでもあります。カッコつけていたら、神様も手を伸ばしようがないのかも知れません。

神様は、私たちに対して、“与えたくて与えたくて仕様がな”神様なのだと思います。そして、その与え方はわが子を愛する親のようだというのです。

「あなたがたの中に、魚を欲しがらる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。また、卵を欲しがらるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。」(11～12 節)

[結] 「聖霊」を与えたい神様

そして神様は私たちに、「最もよきもの」を与えて下さいました。

「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」(13 節)

「聖霊」とは、主イエス・キリストを告白させて下さる霊です。また、私たちの傍らに立ち、慰め、弁護して下さる「キリストの霊」です。たとえ悲しみに沈んでも再び上を向く勇気を与えてくれる霊です。それを私たちに与えて下さる。いや、与えて下さいました。

神様は、そのように、私たちの「内側」にまで入り込み、内側から支えて下さるのです。

今日はこれから**主の晩餐式**も執り行います。聖霊は、**主の十字架と復活の恵み**に生きることを確かなものとして下さいます。「取りて食べよ。取りて飲みなさい。**わたしはわたし自身をあなたに与えたい。遠慮せずに受けて欲しい**」と、今日も私たちを招いていて下さいます。**神の子**とされている恵みを噛み締めつつ、悔い改めと感謝を持って晩餐式にも与りたいと思います。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、ありがとうございます。

今日、一緒に、あなたの子どもとされている幸いを、御言葉から受け取らせて頂きました。

あなたは「だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる」と招いて下さいます。そして、私たちが来ることを待っていて下さいます。どうか、ためらわずに、カッコつけずに、惨めな、このあるがままのわたし自身として、あなたとの出会いを求めて行くことが出来ますように。

日々、あなたが教えて下さった祈りを、私自身の祈りとさせて下さい。そして、どのようなことが起こったとしても、いや、そのようなときこそ、なおあなたを仰ぐ信仰を抱かせて下さい。聖霊ご自身が私たちの内に宿り、あなたの力と慰めを持って導いてください。

私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。 アーメン。